

traividyaṅṛddhāḥ

——或る註記のための覚書——

金 沢 篤

インド古来の文献には、時に *traividya* ないし *traividyaṅṛddha* という語が見出される¹⁾。例えば今日あまりに有名な *Bhagavadgītā* (BG) IX. 20 に次のようにあるのがそれである。

i) *traividyaḥ māṃ somapāḥ yajñair iṣṭvā svargatīṃ prārthayante /*
te puṇyam āsādyā surendralokam aśnanti divyān divi devabhogān //
(BG IX.20: BG_I, p. 429, ll. 1-2)

それに対して、辻直四郎博士は以下のような和訳を与えられた。

1) 三ヴェーダの知識に通じ、ソーマ（神酒）を飲み、罪悪より清められ、われに祭祀を捧げ、天界への道を求むる者、彼らは神王（インドラ）の清浄なる世界に達し、天上において神々の天的享樂を味わう。²⁾

この BG 中、*traividya* の唯一の用例が、何人によっても常に「三ヴェーダの知識に通じ」のように解釈されることには、今日 BG の重要な注釈書として重宝されている Śaṅkara と Rāmānuja の注釈に、それぞれ “...*traividyaḥ ṛgyajuh-sāmaidho...*”³⁾, “*ṛgyajussāmarūpās tistro vidyāḥ trividyaḥ; kevalaṃ trividyaṅṛddhāḥ trividyaḥ,...*”⁴⁾ とあることに困るのであろう。また、既に定評のある V. S. Apte のサンスクリット語辞典の *traividyaḥ* の項目には、“A Brāhmaṇa versed in the three Vedas” という意味が示された上に、この BG の用例が引かれている⁵⁾ のである。だがこの *traividyaḥ* という語は、文法的には、*Pāṇinisūtra* (PS) IV. 1. 88 (*dvigoḥ lug anapatye*⁶⁾) に対する Patañjali の *Mahābhāṣya* (MBh) の以下の記述に従って解釈される⁷⁾ のが普通である。

ii) *iha tāvat traividya itī naivaṃ vijñāyate tistro vidyā adhīte traividya itī /*
kathaṃ tarhi / tryavayavā vidyā trividyaḥ trividyaḥ adhīte traividya itī //

(MBh₁, ii, p. 239, ll. 2-4)

- 2) この場合、先ず *traividyaḥ* ということ、三つの学 (*tisro vidyāḥ*) を知れる、という意味での *traividyaḥ* というようには理解されない。ならばどのようにしてか。三つの部分よりなる学 (*tryavayavā vidyā*) としての三学 (*trividya*) を知れる、という意味での *traividyaḥ* というように〔理解されるのである〕。

したがって、先に触れた Śaṅkara や Rāmānuja による BG 中の *traividyaḥ* に対する注釈は、BG を読み進めてきた者がその文脈から導出した一つの解釈ということになる。もしその語の意味が自明であるとしたなら、どうして注釈を施す必要があろうか。その語を先ずは「三学に通じた者」と解した上で、してその「三学」とは具体的には何を指すものだろうか、さらに「三学に通じた者」とは具体的には何を指すものだろうか、と進めるべきであろう。だが、今日、決定的に無知な我々は、多く辞典にある訳語をそのまま採用し、あるいは手軽な注釈書の説明を自分勝手に理解して、直ちに安心を得ようとする傾向がある。このような素朴な反省に立って、筆者はこれまで色々な文献の中で接した *traividya* ないし *traividyaṅṛddha* の用例を注釈者の記す所に拠ってその語義とその具体的に指示する者について、若干の考察を加えてみたい。謂わば本稿は、筆者の *traividya* ないし *traividyaṅṛddha* に対する註記のためのほんの覚書に過ぎないのである。

こうした論題を筆者が今敢えて持ち出すのは、筆者がこの十年来インドの代表的な言語哲学文献として特に気をかけてきたところの、Maṅḍana 著 *Sphoṭa-siddhi* (SS) と Vācaspati 著 *Tattvabindu* (TB) という二典籍には孰れも *traividyaṅṛddha* という語が現われるが、その両著作のテキスト・仏訳の刊行者である M. Biardeau が、それをそれぞれ “Les hommes qui sont versés dans les trois sciences⁸⁾” (1958), “Les sages versés dans les trois Veda⁹⁾” (1956) と訳を与えて、何ひとつ註記を施していないのを目にしていた¹⁰⁾ためであるが、それに加えてこれらの例に限らず、これらの語がこれまであまり議論の対象とされたことがないことを改めて痛感したからでもある。その二著作では、その語は明らかにある特定の人物（ないし人物群）を指して用いられているが、当然ながら Biardeau は、それに関しても口を噤んでいる。以下には、その両著作における用例を今少し仔細に検討してみたい。

- iii) *ihotkṣepaṇatvādir nānāvyaaktivibhāvanāḥ / ekas traividyaṅṛddhānām hastasaṃjñādigocaraḥ* // (SS k. 33: SS₁, p. 104, ll. 9-10)

- 3) «Les hommes qui sont versés dans les trois sciences, considèrent que le fait de projeter en l'air par exemple, qui a pour but un signe de la main, etc., et qui est révélé par une multiplicité de mouvements singuliers, est un.» (SS₁, p. 65, ll. 17-20)

また、これに関してはSSの別の刊本(及び英訳)を刊行している K. S. Subramania Iyer が “Scholars versed in the three-fold knowledge¹¹⁾” と英訳を与え、それに註記して、SSの注釈書 *Gopālikā* (G) による注釈を簡単に紹介している¹²⁾。Iyerの英訳で注目すべきは、traividya-の根底にある trividyaが、先に見た Patañjaliの記述を踏まえた形で、les trois sciences(したがって、the three knowledges)ではなしに、the three-fold knowledge¹³⁾とされている点であろう。Iyerの依拠したGには、以下の如くある。

- iv) sāṅgo veda ekā vidyā, smṛtitiḥāsapurāṇāyurvedādīny ekā vidyā, mimāṃsā nyāyavistarā vaiketi; tisro vidyāḥ ye vidur adhiyate ca tatra ca pāraṅgatās te traividyaṣṛddhāḥ /...atha vā trayo vedās tisro vidyāḥ, anyeṣāṃ tatrāntargatatvāt; śeṣaṃ pūrvavat / atha vā traividyaṣṛddhaśabdo 'pi prakaraṇād vaiyākaraṇān eva viṣayīkaroti; teṣāṃ eva vacanaṃ na hy anyatheti / (G:SS₂, p. 253, ll. 10-12, p. 255, ll. 14-16)

- 4) 補助学ともヴェーダが、一つの学であり、聖伝書、叙事詩、プラーナ、アーユル・ヴェーダ等が一つの学であり、ミーマンサーないしニヤーヤが一つの学である。[これら]三つの学を賢明なる者が学習し、次いでそれに通曉せるならば、彼らは三学に通曉せる者である。…あるいはまた、三つのヴェーダが三つの学である。他の[諸学]は、そのうちに含まれるから。[したがって traividyaṣṛddhāḥ は、三つのヴェーダ、即ち、リグ・ヴェーダとヤジュル・ヴェーダとサーマ・ヴェーダからなるヴェーダ学に通曉せる者、と解釈すべきかもしれない。]他の箇所は、前と同様に[解釈される。]あるいはまた、traividyaṣṛddha という語も、文脈よりは、他ならぬ文法学者たちを意味している[と、解釈すべきかもしれない。]何故なら、他ならぬ彼ら[文法学者たち]の言辞(vacana)は、[それとは]別様ではないから。以上。

こうした注釈を見ると、我々に比して遙かに教養のあるインド人の学匠の traividyaṣṛddhāḥ という語に接する態度も、我々と本質的に変わるところがないことが知れて勇気づけられはする。やはり本稿で筆者が問題にしようとする traividya ないし traividyaṣṛddha は、相当にやっかいな語ということであろう。とにかくここでは、traividya ないし traividyaṣṛddha という語が内包する

「三」(tri)に対しては、先に見た BG に対する Śaṅkara や Rāmānuja などとは別の解釈の可能性が現にあったこと、及び Maṇḍana の SS 中の traividya-ṽṛddhāḥ は具体的には或る文法学者 (Vaiyākaraṇa) を指示していた可能性もあること、という二点を確認しておきたい。

v) ‘ananyalabhyaḥ śabdārthaḥ’ iti hi traividyaṽṛddhāḥ / ata evākhyātādau kartrādyabhīdhāyitām nādriyante / (TB₁, p. 85, ll. 8-9)

5) Les sages versés dans les trois Veda(s) disent en effet que “le sens d’un mot ne peut être compris que par lui-même”. C’est pourquoi par exemple, ils nient que l’agent soit exprimé dans le verbe (par la désinence). (TB₁, p. 47, ll. 19-20)

Gの作者 Rṣiputraparameśvara の TB に対する注釈書 *Tattvavibhāvanā* の当該部分が欠落¹⁴⁾ していて参照出来ないことが惜しまれるが、TB の別の刊本の編者 A. Subrahmanya Shastri が、*Mīmāṃsāratna* と称する自らの注釈書のうちに、“traividyaṽṛddhāḥ—bhāṣyakāraś śābarasvāmināḥ kartradhikaraṇe iti śeṣaḥ¹⁵⁾” と記していることが興味を引く。その根拠を Shastri は必ずしも明確に示していないが、筆者はかつて「ananyalabhya-śabdārtha に就て」¹⁶⁾ という小論を草して、traividyaṽṛddhāḥ には触れることなしに、一般にミーマンサー学派の数ある原則 (nyāya) の一つとして知られる¹⁷⁾ traividya-ṽṛddhāḥ のその学説の一歴史的展望を企てた。だが、残念ながら今もって著者 Vācaspati が如何なる意味で traividyaṽṛddhāḥ という語を用いたか、あるいは一体 Vācaspati が具体的に誰のことを念頭においてその語を用いたかについて、確定的な結論を得られないでいる。ただし、筆者の先の論稿で明らかになったように、TB では traividyaṽṛddhāḥ の学説とされる、一般的にはミーマンサー学派の nyāya として知られるこの ananyalabhyaḥ śabdārthaḥ が、その原型を Kumārila の *Tantravārttika* (TV) 中に辿り得ること¹⁸⁾、またその基礎となる議論は Śābara の *Śābarabhāṣya* (SBh) 中に見出されること¹⁹⁾、さらに Vācaspati の *Bhāmātī* に、“ye tv ākāśaśabdo brahmaṇy api mukhya eva nabhavad ity ācakṣate, taiḥ ‘anyāyaś cānekārthatvam’ iti ca ‘ananyalabhyaḥ śabdārthaḥ’ iti ca mīmāṃsakānām mudrābhedaḥ kṛtaḥ²⁰⁾” (しかるに、ākāśa という語は「虚空」と同様、「ブラフマン」をも第一義的に意味するものに他ならない、と考える者たちによって、「また、[一つの語が] 複数の意味を持つことは、不正である」「他によって得られないところのものが、語の意味であるという

[原則が], ミーマンサー学派特有の目印とされたのである) との記述を見出すことから, Vācaspati がどうやら traividyaṣṛddhāḥ という語で, ミーマンサー学派の或る学匠 [ら] を考えていたらしい²¹⁾とは推定し得るであろう。

以上見たところによって, 文献中でその著者が traividyaṣṛddha ないし traividyaṣṛddha を如何なる意味で用いているかということ割り出すためには, その著者が「学」(vidyā) ないし「三学」(trividya) をどのように考えていたかを問題にする必要がある。以下では, そうした観点より, その格好の資料を与えらると思われる *Manusmṛti* (MS) と *Kauṣṭhīya-Arthaśāstra* (KAS) の用例を中心に検討してみたい。

vi) brāhmaṇān paryupāsita prātar utthāya pārthivaḥ /
traividyaṣṛddhān viduṣas tiṣṭhet teṣāṃ ca śāsane // (MS VII. 37: MS₂,
p. 27, ll. 23-24)

6) Let the king, after rising early in the morning, worship Brāhmaṇas who are well versed in the threefold sacred science and learned (in polity), and follow their advice. (LM, p. 221, ll. 22-25)²²⁾

これに対して, 有名な注釈書である Medhātithi 註には次のようにある。

vii) traividyaṣṛddhān / tiṣṭnāṃ vidyānāṃ samāhāraḥ traividyaṃ, tadadhitiṇaḥ traividya rūḍhya ṛgvedādivedatrayādhyāyina ucyante / ...ṣṛddhās traividyaṇāṃ śreṣṭhāḥ... (MS₂, p. 27, ll. 28-29)

7) traividyaṣṛddhān とは, 三つの学の集合としての三学。その [三学] を知れる者たち, [という意味での三学を知れる者たち] traividyaḥ は, 慣用的には (rūḍhya), リグ・ヴェーダ等の三ヴェーダを学習せる者たちであると言われている。... ṣṛddhāḥ²³⁾ というのは, 三学 [つまり三ヴェーダ] を学習せる者たちのうちの卓越せる者たち (śreṣṭhāḥ) であり, ...

6) の訳者 G. Bühler は, この MS に対する Medhātithi 註を承知しつつも, traividyaṣṛddha を字義通りに解釈するに止めて, それ以上に踏み出すことはなかった。一方, Nandana 註には以下のようにある。

viii) trayī daṇḍanītir ātmavidyā ceti tisro vidyās trayī vidyā tām adhiyata iti traividyaḥ / (MS₂, p. 28, ll. 5-6)

8) 三ヴェーダ学 (trayī), 政治学 (daṇḍanīti), アートマン学 (ātmavidyā) という三つの学よりなる三学 (trayī vidyā) という学を知る, という意味で「三学を知れる者たち」である。

また、Bhārucci 註ではこうなる。

ix) trayo 'vayavā yasyeti trayī / tasya ye granthārthayor ṣṛddhās te traividyaṣṛddhās tān / atha vā... (MS₂, p. 28, ll. 12-13)

9) 三つの部分からなるものが三学であり、その〔三学〕の書物と意義に長じている者たちが、三学に長じている者たちである。かれらに、[という意味]である。或いはまた、…

三 vidyā の内容を明示しない Bhārucci 註に対して、Nandana 註は、Medhātithi 註とも異なって、①三ヴェーダ学 (trayī), ②政治学 (daṇḍanīti), ③アトマン学 (ātmaavidyā) という三者よりなる三学 (trayī vidyā) と解釈する点で際立っている。こうした解釈は、Bühler の採用するところとはならなかったものの、それなりに筋が通っているようにも見える。MS VII. 37 に続く部分に、以下のようにあるからである。

x) traividyebhyas trayīṃ vidyāṃ daṇḍanītiṃ ca śāsvatīm / ānvikṣikīṃ cātmaavidyāṃ vārtārambhāṃś ca lokataḥ // (MS VII. 43: MS₂, p. 31, ll. 20-21)

10) From those versed in the threefold sacred science let him learn the three Vedas, primeval science of government, the science of dialectics, (which gives) self-knowledge; from the people (the theory of) the (various) trades and professions.²⁴⁾

ある意味では極めて複雑な様相を呈しているこの MS VII. 43 ではあるが、はっきりしていることは、そこに列挙された種々の vidyā が、traividya²⁵⁾ と loka の二者に基づいて学ばれるべきものであり、viii) の Nandana 註において MS VII. 37 中の traividyaṣṛddha の traividya- の内実を示すものとしてふり当てられた三つの学のいずれもが、MS VII. 43 で traividya に基づいて学ばれるべきとされている点である。或いはまた、Medhātithi 註が MS VII. 37 の場合 rūḍhi を持ち出して traividyaṣṛddha を三ヴェーダと結びつけたり、Bühler がこの MS VII. 43 において traividya に対して those versed in the three Vedas との誤記(?)を黙認した²⁶⁾ のには、MS VII. 38 に次のようにあったことと関係しているのかもしれない。

xi) ṣṛddhāṃś ca nityaṃ sevati viprān vedavidyaḥ śucin / ṣṛddhasevi hi satataṃ rakṣobhir api pūjyate // (MS VII. 38 : MS₂, p. 28, ll. 15-16)

- 11) Let him daily worship aged Brāhmaṇas who know the Veda and are pure; for he who always worships aged men, is honoured even by Rākshasas. (LM, p.221, ll.26-28)²⁷⁾

ここに ṽṛddhān などと共に現われる vedavidaḥ は、MS VII.37 の traividyaṽṛddhān の traividya- を説明するものとも考えることも出来るからである。それはともかく、この MS VII.37 及び VII.43 で顕わになる traividya ないし traividyaṽṛddha の解釈の問題は、例えば KAS の以下の記述との関わりで、更に検討すべきものであろう。

- xii) ānvīkṣikī trayī vārttā daṇḍanīś ceti vidyāḥ / 1 / trayī vārttā daṇḍanīś ceti mānavāḥ / 2 / trayīviśeṣo hy ānvīkṣikīti / 3 / vārttā daṇḍanīś ceti bārhaspatyāḥ / 4 / saṁvaraṇamātram hi trayī lokayātrāvida iti / 5 / daṇḍanītir ekā vidyety auśanasāḥ / 6 / tasyāṁ hi sarvavidyārambhāḥ pratibaddhā iti / 7 / catastra eva vidyā iti kauṭilyaḥ / 8 / tābhīr dharmārthau yad vidyāt tad vidyānāṁ vidyātvam / 9 / (KAS I.2.1-9: KAS₁, i, p.4, ll.3-9)

- 12) Philosophy, the three Vedas, economics and the science of politics — these are the sciences. ‘The three Vedas, economics and the science of politics (are the only sciences),’ say the followers of Manu. ‘For, philosophy is only a special branch of the Vedic lore.’ ‘Economics and the science of politics (are the only sciences),’ say the followers of Bṛhaspati. ‘For, the Vedic lore is only a cloak for one conversant with the ways of the world.’ ‘The science of politics is the only science,’ say the followers of Uśanas. ‘For, with it are bound up undertakings connected with all the sciences.’ ‘For, indeed, is the number of the sciences,’ says Kauṭilya. Since with their help one can learn (what is) spiritual good and material well-being, therefore the sciences (vidyās) are so called. (KAS₁, ii, p.5, l.19-p.6, l.12)²⁸⁾

vidyā についての諸説が列挙・要約されている KAS のこの箇所は、極めて貴重なものであり、古来学者たちの論議の対象となってきたが、これまでその「vidyāの分類」とそれと共に現われる「三学に通曉せる者」(traividya-) との関わりで、論議されたことはなかった。当然のことながら、ここで訳者 R. P. Kan-
gle によって the followers of Manu (mānavāḥ) と訳された人物の見解が、先に見た MS VII.43 と符合するものか否かは学者によって意見が分かれるところ

である²⁹⁾。この KAS の mānavāḥ の vidyā に関わる記述が MS VII. 43 と関わりを持つと考える立場よりすれば、その MS VII. 43 の一つの解釈である¹⁰⁾は若干の補足説明を余儀なくされるであろう。MS VII. 43 で王が traividya 及び loka より学ぶべきものとして列挙される四つの vidyā 即ち、①三ヴェーダ学 (trayī), ②政治学 (śāsvatī~daṇḍanīti), ③哲学 (ānvikṣiki←ātmavidyā), ④経済学 (vārtā or vārttā)のうち、ānvikṣiki は、trayī に包摂される、と。MSの見解としてこの説明が妥当か否かに関しては簡単に断を下せるようにも思われぬが、何れにしても MS, KAS の両著作において、vidyā の列挙が明確になされており、その列挙されるもののうちに、やはり trayī と表現されるヴェーダ学があることが、この場合のtraividya-の解釈に大きく関与してくることは否めない事実であろう。現に、原著者の意図が必ずしも正確に伝承されたわけではなかつたであろうことは、MS の諸注釈者たちの間に微妙な混乱・当惑を引き起こしたことからも、容易に見て取れるのである。だが、今日の学者たちの混乱はもっと深刻なものがあると思われるのは、そうした vidyā の列挙されている事実をはっきりと承知しつつも、或る文脈の中に唐突に、しかも明確な説明もなしに現われてくる traividya- ないし traividyaṣṛddha といった語を目にしてそれに訳を付す時である。この KAS の箇所が続く部分には、以下の用例が見出されるのである。

xiii) agnyagāragataḥ kāryaṃ paśyed vaidyatapasvinām / purohitācāryasakhaḥ pratyutthāyābhivādya ca // 31 // tapasvinām tu kāryāṇi traividyaīḥ saha kārayet / māyāyogavidām caiva na svayaṃ kopakāraṇāt // 32 // (KAS I. 19. 31-32: KAS₁, i, p. 27, ll. 14-17)

13) He should look into the affairs of persons learned in the Vedas and of ascetics after going to the fire sanctuary (and) in the company of his chaplain and preceptor, after getting up from his seat and saluting (those suitors). But he should decide the affairs of ascetics and of persons well versed in the practice of magic, (in consultation) with persons versed in the three Vedas, not by himself (alone), for the reason that they might be roused to anger. (KAS₁, ii, p. 47, ll. 15-22)³⁰⁾

vidyā に関する諸説を明確に紹介するKAS中のこの vaidya³¹⁾ と traividya の用例に接して、Kangle の訳文に一種の曖昧さが突出してくるよう考えるのは、筆者ひとりであろうか。即ち、vaidya- という語と traividya という語の訳が、それぞれ persons learned in the Vedas, persons versed in the three

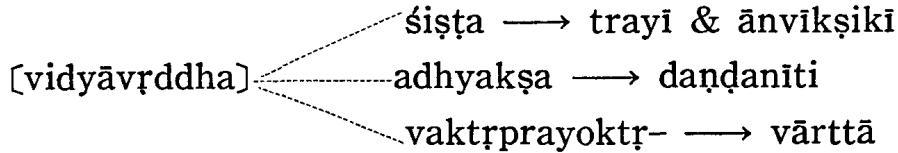
Vedas と与えられていることである。vidyā, trividya (=tryavayava~vidyā) に「〜に通じた」(adhita) という意味をもたらす taddhita 接尾辞 aṅ が付加することによって導出される vaidya, traividya を孰れも直ちにそのように解釈してよいものだろうか。先に見たように、vidyā の分類・列挙に関しては、異説があり、KAS が打ち出している筈の Kauṭilya の学説では、①哲学 (ānvikṣiki) と②三ヴェーダ学 (trayī) と③経済学 (vārttā) と④政治学 (daṇḍanīti) の四種が vidyā である。また、この箇所に先立つ、daṇḍanīti の説明の箇所においては、次のように記されている。

- xiv) ānvikṣikītrayīvārttānām yogakṣemasādhano daṇḍaḥ, tasya nītir daṇḍanītiḥ, ... (KAS I.4.3: KAS₁, i, p.6, l.1)
- 14) The means of ensuring the pursuit of philosophy, the three Vedas and economics is the Rod (wielded by the king); its administration constitutes the science of politics, ... (KAS₁, ii, p.9, ll.18-19)³²⁾
- xv) tasmād daṇḍamūlas tisro vidyāḥ / 1 / (KAS I.5.1: KAS₁, i, p.6, l.18)
- 15) Therefore, the three sciences have their root in the (just administration of) the Rod. (KAS₁, ii, p.10, ll.16-17)³³⁾
- xvi) vṛttopanayanas trayīm ānvikṣikīm ca śiṣṭebhyo vārttām adhyakṣebhyo daṇḍanītiḥ vaktṛprayoktṛbhyaḥ / 8 / (KAS I.5.8: KAS₁, i, p.7, ll.1-2)
- 16) When the initiation with the preceptor is performed, he should learn the three Vedas and philosophy from the learned, economics from the heads of departments (and) the science of politics from theoretical and practical exponents. (KAS₁, ii, p.11, ll.4-7)³⁴⁾
- xvii) nityaś ca vidyāṅgāḥ vinayavṛddhyartham, ... (KAS I.5.11: KAS₁, i, p.7, l.4)
- 17) And (he should have) constant association with elders in learning for the sake of improving his training, ... (KAS₁, ii, p.11, ll.10-11)³⁵⁾

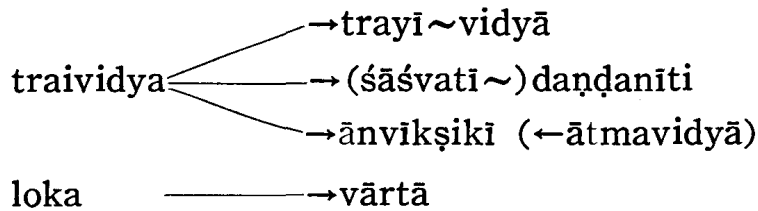
xii), xiv), xv), xvi), xvii) と記された後に来る、vaidya-, traividya を含む xiii) であることを忘れてはなるまい。この部分が仮りに一人の作者によって記されたものだとするならば³⁶⁾、xiii) に現われる vaidya-, traividya を直ちに、四vidyāの一つに過ぎない三ヴェーダ学としての trayī に因んだ語と理解することは妥当であろうか。筆者の見る限りでは、テキスト・英訳と共にある詳細な註記と研究のうちに、Kangle は、この traividya (ないし vaidya) に言及することはないようなのである。

或いはまた, xvi) の KAS I.5.8 を, x) の MS VII.43 と比較してみるのも興味深いかもしれない。それを viii) の MS VII.37 における traividyaṣṛddhā に対する Nandana 註と共に整理するならば以下のようなになる。

【KAS I.5.8】



【MS VII.43】



【Nandana ad MS VII.37】

traividyaṣṛddhā ——— trayī = trayī, daṇḍanīti, ātmavidyā

さらに, xv) では, 三 vidyā (tisro vidyāḥ) という語で, daṇḍanīti を除く ānvikṣikī と trayī と vārttā が意味されている, という事情がある。こうした点を考え併せるならば, xiii) 中の vaidya-, traividya を三ヴェーダ学としての trayī に基づいて解釈することが, 如何に大胆なことであるかが納得されるであろう。しかも英訳に丹念に註記を付すことを常に心掛けているらしい Kangle は, その訳に際しては, 口を噤んでいるのである。ただ一つははっきりしていることは, 「王」ないし「王子」に対して何某かの vidyā を教授し得る者はその何某かの vidyā に通曉している筈だ, という MS VII.37 に対する Nandana 註にも窺われた常識である。MS VII.43 に記される traividya は, 少なくとも trayī と daṇḍanīti と ānvikṣikī に通曉していなければなるまい。上に見たように, ānvikṣikī が仮りに trayī に包摂されるものだとしても, その教授者は trayī と daṇḍanīti には通曉している必要があるだろう。各種 vidyā を明確に列挙し, その実質と相互の関係を明示している KAS の場合は, 少なくとも trayī と daṇḍanīti は類別される筈である。だが, MS の場合はどうだろうか。MS においては, MS VII.43 を除いて KAS のように vidyā の個々が分類・列挙されることはない。或いはまた, P. V. Kane の指摘するように, MS の作者は MS VII.43 においても KAS I.2.1-9 のようには vidyā の分類・列挙を意図しなかったのかもしれ

ない³⁷⁾。おまけに以下の MS II.7 に見られるように、MS においてはヴェーダの一切知所成 (sarvajñānamaya)³⁸⁾が唱われているのである。

xviii) yaḥ kaś cit kasya cid dharmo manunā parikīrtitaḥ /
sa sarvo 'bhihito vede sarvajñānamayo hi saḥ // (MS II.7: MS₁, p.117,
ll.16-17)

18) Whatever law has been ordained for any (person) by Manu, that has been fully declared in the Veda: for the Veda is the source of knowledge of all things.³⁹⁾

したがって、MS においては、ヴェーダに通曉している者は一切の vidyā の教授者たり得るであろう。この意味で、MS VII.37, 43 中の traividyaṣṛddha, traividya は、ともに三ヴェーダ学としての trayī に由来する語として用いられている、と主張することは、それなりに説得力を持つように思われるのである。してみると、やはり traividya, traividyaṣṛddha の語義解釈に当たっては、三ヴェーダ学としての trayī の詮議を欠くことはできないようである。その trayī に関しては、KAS では以下のように明記されている。

xix) sāmargyajurvedās trayas trayī / 1 / atharvavedetihāsavedau ca vedāḥ / 2 / śikṣā kalpo vyākaraṇaṃ niruktaṃ chandovicitir jyotiṣam iti cāṅgāni / 3 / eṣa trayīdharmaś ... (KAS I.3.1-4: KAS₁, i, p.4, ll.18-20)

19) The Sāmaveda, the Ṛgveda and the Yajurveda, — these three are the three Vedas. (These three), the Atharvaveda and the Itihāsaveda are the Vedas. ... Phonetics, Ritual, Grammar, Etymology, Prosody and Astronomy, — these are auxiliary sciences. ... The law laid down in this Vedic lore ... (KAS₁, ii, p.7, ll.9-14)⁴⁰⁾

こうしたヴェーダ学 (→trayī) と並び称せられるものとして、KASでは ānvīkṣiki, vārttā, daṇḍanītiがあった。さらに、その結果として、xiii)中の vaidya, traividya をそれぞれ「(三) ヴェーダに通曉せる者」ではなしに、「学識者」, 「三学に通曉せる者」と解釈するに止めておくべきことを、筆者は上に示したのであった。

以下には、この trayī と traividya の関係を伺う上で興味深い用例を今少し検討してみよう。それは、*Jaiminisūtra* (JS) III.3.5 とそれに対する SBh の一節である。

xx) trayīvidyākhyā ca tadvidi // 5 // (JS III.3.5)

trayī yasya vidyā sa trayīvidyaḥ / yas trīn vedān adhīte sa evaṃ prakhyāyate / trayīti caiṣa śabda ṛksāmayaḥ / yadi ṛksāmayaḥ trayo vedā ucyante, evaṃ tadvidi trayīvidyākhyā yujyate, bhavati ca / tasmād vedādhikārā ete // (MD, iv, p.202, 1.9–p.203, 1.2)

20) «The name ‘Trayīvidya’ is applied to one who knows the three Vedas (‘trayī’).»

That person is called ‘*Trayīvidya*’ whose learning (*vidyā*) consists of the ‘*Trayī*,’ — i. e. one who reads the *three Vedas* is called ‘trayīvidya’. As a matter of fact, the term ‘*trayī*’ is well known as applying to the *Ṛk, Sāman and Yajus*; and it is only by reason of these three terms — ‘*ṛk*’, ‘*sāman*’ and ‘*yajus*’ — standing for the *three Vedas*, that the name ‘*Trayīvidya*’ is applicable, — and actually applied — to the person knowing the *three Vedas*. For this reason also the words in question must stand for the *Vedas*. (JhSBh, i, p.439, ll.22–31)

何と、このミーマーンサー学派の根本經典たる JS とそれに対する SBh には、語形の上でも音の上でも、traividya- と酷似している trayīvidya なる語が見出されるのである。またその trayīvidya に対して TV 中で註記している Kumārila が、同じく TV 中でそれと同義と見做し得る trayīvid⁴¹⁾ に加えて、問題の traividyaṣṛddha を、“niścītavedaprāmāṇyaiś ca traividyaṣṛddhair vijñāyāmānatvāt svārthe ’py ānarthakyaṃ⁴²⁾” や “tathā ca ṛgvedādivihitayajñāṅgabhreṣapṛāyaścittaviśeṣān abhidhāya ‘yajñavijñāta iti /’ pṛāyaścittāntaraṃ vidadhat traividyaṣṛddhasmṛtīvihitavinaṣṭoddeśenaiva vidadhātīti gamyate⁴³⁾” と用いている⁴⁴⁾ことが注目されよう。即ち、Kumārila によれば、前者からは、traividyaṣṛddha が「ヴェーダの權威性を決定している者」であることが知れるし、後者においては、ṛgveda 等が、英訳者 G. Jhā によって “the works of these Vedic authors⁴⁵⁾” と訳される traividyaṣṛddhasmṛti と対比的に用いられており、しかも問題の traividyaṣṛddha が、或る聖伝書 (Smṛti) の作者を呼称する語として用いられていることが知られるのである。

さらに今日 KAS の注釈書のような位置付けを得ている⁴⁶⁾ *Kāmandakīya-Nīti-sāra* II.12–13 には、“ṛgyajuḥsāmanāmānas trayo vedās trayī matā / ubhau lokāvam āpnoti trayyāṃ tiṣṭhān yathāvidhi // aṅgāni vedās ca-

tvāro mīmāṃsā nyāyavistarahaḥ / dharmasāstraṃ purāṇaṅ ca trayidaṃ sarvam ucyate //⁴⁷⁾” とあり, trayī (狭義) を含む14学⁴⁸⁾ よりなる一つの体系としてのヴェーダ学もまた trayī (広義) と呼称されるという。また, *Viṣṇupurāṇa* III. 6. 28-29 などに見られるような, KAS をも意味する筈の Arthasāstra (or Arthaveda) をも含むヴェーダの18学分類法⁴⁹⁾ によれば, KAS で, ānvikṣikī, trayī, vārttā, daṇḍanīti と立てられた四 vidyā も全て広義の意味で, trayī と呼称し得ることになろう。とすれば, SS中の traividyaṣṛddha に対して, ① sāṅga~veda, ② smṛti-itihāsa-purāṇa-āyurveda-ādi, ③ mīmāṃsā or nyāyavistara と注釈した iv) に見られる Rṣiputraparameśvara の努力など吹き飛んでしまし、traividya ないし traividyaṣṛddha に関する確定的な結論を目指したものですらない本稿の極めてトリヴィアルな作業も無意味なものとなるであろう。「ヴェーダを容認する(容認出来る)か否か」という一点だけが真に深刻な問いかけとして機能し得た「宥和的な文化」を前にしては、本来的に話し手(ないし書き手)の意図次第でどのようにも用い得る言葉の意味などは、悉く「慣用」(rūḍhi) や「常識」(prasiddhi) に委ねてしまい、真に有意味なものであるその言葉が具体的に指示するもの——歴史上の人物(ないし人物群)の詮議⁵⁰⁾にのみ目を据えるべきなのだろうか。結局のところ、筆者自身そう思わぬわけでもないのである。 (昭和63年 夏)

《略号表》

- BG₁: [Bhagavadgītā with Śāṅkarabhāṣya, ...], New Delhi, 1978 (2nd Ed.)
 BG₂: [Bhagavadgītā with Rāmānujabhāṣya, ...], UVGM, Madras, 1972
 BSi₁: *Brahmasiddhi with Commentary ...*, SGDOS 16, Delhi, 1984 (2nd Ed.)
 BSSBh: [Brahmasūtra-Śāṅkarabhāṣya with Bhāmatī, ...], Bombay, 1938
 HD: *History of Dharmasāstra* by P. V. Kane, 5 vols (8pts), Poona, 1968-77 (2nd Ed.)
 JhSBh: G. Jhā, tr., *Shabara-bhāṣya*, 3 vols, GOS 64, Baroda, 1933-35
 JhTV: G. Jhā, tr., *Tantravārttika*, 2 vols, BI 161, Calcutta, 1924
 KAS₁: *The Kauṭilya Arthasāstra* by R. P. Kangle, 3 pts, Delhi, 1986 (Reprint)
 KAS₂: *Kauṭilyārthasāstra ...*, ed. by N. S. Venkatanathacharya, Mysore, 1960
 LM: *The Laws of Manu ...* by G. Bühler, SBE 25, Oxford, 1886
 MBh₁: *The Vyākaraṇa-Mahābhāṣya ...* ed. by F. Kielhorn, 3 pts, Poona, 1962-72 (3rd Ed.)

- MD: [Mīmāṃsādarśana], 7 pts, AnSS 97, Poona, 1970-75
 MS₁: *Manu-Smṛti with Nine Commentaries ...*, I, Bombay, 1972
 MS₂: *Manu-Smṛti with Nine Commentaries ...*, IV-1, Bombay, 1985
 LR: *Language and Release ...* by I. Kocmarek, Delhi, et., 1985
 PMM: *La Philosophie de Maṇḍana Miśra ...* Brahmasiddhi par M. Biardeau, Paris, 1969
 SS₁: *Sphoṭa Siddhi ...* par M. Biardeau, Pondichery, 1958
 SS₂: [Sphoṭasiddhi with Gopālikā], Madras, 1931
 SS₈: *Sphoṭasiddhi of Maṇḍana Miśra (Eng. Tr.)* by K. A. Subramania Iyer, Poona, 1966
 TB₁: *Le Tattvabindu ...* par M. Biardeau, Pondichery, 1956
 TB₂: [Tattvabindu with Tattvavibhāvanā], Annamalai, 1936
 TB₈: [Tattvabindu with Mīmāṃsāratna], Varanasi, 1975

註

- 1) traividya ないし traividyaṣṛddha (ないし後に問題にされる vaidya) という語は、本文に引用される BG の他にも *Mahābhārata* には屢々用いられる。また、本稿で検討される MS 以外の種々法典 (*Yājñavalkya-smṛti*, etc.) にもこれらの語は散見するが、本稿では諸般の制約から一切取扱わない。また仏典における用例については F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. II, Delhi, 1970 (Reprint), p. 260 などを参照された。
- 2) 辻直四郎著『バガヴァッド・ギーター』講談社 (東京 昭55年) 153頁4-7行。
- 3) BG₁, p. 429, 1. 6.
- 4) BG₂, p. 307, 1. 10.
- 5) Cf. V. S. Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Revised & Enlarged Ed., Kyoto, 1978, pp. 793-794.
- 6) MBh₁, ii, p. 239, 1. 1.
- 7) 諸注釈者の中で、この複合語をパーニニ文法の見地から文法的に説明した者として BG IX. 20 に対する複註における Vedāntadeśika が注目されるべきであろう。Cf. BG₂, p. 307, ll. 23-27.
- 8) 後出訳文 3) 参照。なお Biardeau は、SS 中もう一例ある traividyaṣṛddha (SS₁, p. 104, 1. 11) に対して、“les gens versés dans les trois sciences” (SS₁, p. 65, 1. 23) との訳を与えている。
- 9) 後出訳文 5) 参照。
- 10) Biardeau は、TB₁, SS₁ に次いで刊行した Maṇḍana の *Brahmasiddhi* (BSi) の

(34)

traividya-vṛddhāḥ (金沢)

研究書 PMM においては、BSi にただ一度現われる traividya-vṛddha の用例(BSi, p. 156, ll. 19-20) に対して、“les experts de la Triple Science” (PMM, p. 340, l. 10) との訳を与えている。それに対してもやはり註記を付していないが、traividya-vṛddha という一語に対して同一の学者によって三様に様えられた訳に、Biardeau の研究の進展の程が如実に反映しているようで、興味深い。

- 11) SS₃, p. 90, ll. 1-2.
- 12) Ibid, p. 90, ll. 14-19.
- 13) Biardeau の仏訳では、la Triple Science に対応するものである。註 10) 参照。
- 14) Cf. TB₂, [Text], p. 131.
- 15) TB₃, p. 54, ll. 17-18.
- 16) 『印仏研』30-2 (昭57年2月) 132-133頁。
- 17) Cf HD, V-II, p. 1339, etc.
- 18) 註 16) の拙稿参照。
- 19) 註 16) の拙稿参照。
- 20) BSSBh, p. 298, ll. 2-4. Cf. K. Kunjunni Raja, “On the date of Śaṅkarācārya and allied problems”, ALB, vol. 24, p. 145, n. 1. なお、問題の “ananyalabhyaḥ śabdārthaḥ” と併記されている “anyāyaś cānekārthatvam” は、SBh ad JS II. 1. 12 (MD, ii, p. 386, l. 2) 等であり、それと類似の “anyāyaś cānekaśabdatvam” が、JS I. 3. 26 (MD, ii, p. 213, l. 2) である。また、ここで明確にミーマーンサー学派と結び付けられる “ananyalabhyaḥ śabdārthaḥ” は、Ānandapūrṇamunīndra の *Nyāyacandrikā* (Madras, 1959) では、“...na vyakteḥ śabdārthatvam ; ananyalabhyatvābhāvāt / jātau punaḥ śabdaprayuktaiva śaktiḥ, iti jātir abhidheyeti traividya-vṛddhāḥ //” (p. 193, ll. 6-7) というように、ミーマーンサー学派の定説である「語の jāti 表示説」とやはり traividya-vṛddha に結びつけられている。
- 21) 本稿に traividya-vṛddha の用例を提供した Vācaspati が *Tattvakaumudī* (ad *Sāṅkhyakārikā* 9) では、sāṅkhyavṛddha という語を或るサーンキヤの先達に対して用いていることから、少なくともサーンキヤ学派の学匠には traividya- との呼称は適用され得なかった、と言い得るであろうか。註 23) 参照。
- 22) Bühler の英訳を参照している田辺繁子訳『マヌの法典』岩波文庫 (東京 昭28年) では、「王は夙に起き、三ヴェーダに通曉し、博識なるバラモンを恭敬し、而してその教令に従ふべし。」(183頁8-9行) とある。
- 23) vṛddha については古来様々に論議されている。KAS I. 5. 11 から知る通り、それが単に年長者を意味するのではないことを確認するに止めるが、その解釈に当たっては、*Rāmāyaṇa* の “śilavṛddhair jñanavṛddhair vayovṛddhaiś ca...” (NS Ed.; II. 1. 12) や *Hitopadeśa* の “vidyāvayovṛddhebhyo dharmam...” (Kale

Ed., p. 13, ll. 16-17) などの用例をも考慮すべきであろう。Cf. J. Jolly, *Recht und Sitte*, Strassburg, 1896, pp. 26ff; etc. なお、最近刊行された矢野道雄著『インド医学概論』朝日出版社（東京 昭63年）xxi 頁が、本稿とも関わりのある *vṛddha* と *trayī* という二語よりなる *Vṛddha-trayī* との語に言及し、*vṛddha* についての知見を紹介していることを付記する。

- 24) LM, p. 222, ll. 14-19 には MS VII. 43 の英訳として, “From those versed in the three Vedas₁, let him learn the threefold (sacred science)₂, the primeval science of government, the science of dialectics, and the knowledge of the (supreme) Soul₃;...” とあるも、下線部 3 を巻末 (pp. 613-615) 《Additions and Corrections》p. 614, ll. 38-41 に従って修正した他、*traividyebyhas* と *trayīm vidyām* を明らかに取り違えている（誤記か？）と見なして、下線部 1 と 2 を入れ替えたが、それが Bühler の意に適うかどうかは必ずしも自信がない。なお、前掲田辺訳では「(王は) 三ヴェーダに通曉せる者より三ヴェーダの聖知を、更に司法、裁判の学を、論理学、及び（最高）我に関する知識を（学び、）又、人民よりは（種々の）商業につき学ぶべし。」(184頁3-4行) とある。この田辺訳は上記 LM の《Additions and Corrections》を参照していないのであろうか。
- 25) *traividya* という語は、MS II. 28 にもう一例“*svādhyāyena vratair homais traividylenejyayā sutaiḥ / mahāyajñaiś ca yajñaiś ca brāhmiyaṃ kriyate tanuḥ //*” (MS₁, p. 209, ll. 1-2) とあるが、Nandana 註は、MS VII. 37 の場合とは異なってその *traividya* を中性語と解し、“*trividyaḥ vedeti traividyaḥ tasya bhāvas traividyaṃ vedatrayārthajñānam iti yāvāt //*” (MS₁, p. 211, l. 27) と注釈している。Bühler は、それに対しても厳格に、“by (the acquisition of the) threefold sacred science” (LM, p. 34, ll. 8-9) と英訳を与え、註記してそれを the three Vedas と結びつけて解する Medhātithi 註、Nandana 註等を紹介している。Bühler は *svādhyāyena* を “By the study of the Veda” (LM, p. 34, l. 7) と訳しており、Medhātithi 註、Nandana 註等に従って *traividya* を解釈したならば意味が重複してしまうことを、Bühler は深く畏れたのであろう。因みに、Bühler の英訳を参照している筈の前掲田辺訳では、その両語を「ヴェーダの学習により」(*svādhyāyena*) (44頁12行)、「リグ、ヤジュル、サーマの三聖典習得)により」(*traividya*) (44頁12-13行) となっており、表向きの重複を避けようとして反って、その混乱を露呈しているように思われる。
- 26) 註 24) 参照。
- 27) 前掲田辺訳では、「彼は日々、長老にしてヴェーダに通じ、且つ、潔白なるパラモンを供養すべし。なんとすれば、常に長老に供養する者は、羅刹すらこれを尊敬す。」(183頁10-11行) とある。

- 28) Kangle の英訳を参照している上村勝彦訳『カウティリヤ実利論—古代インドの帝王学—』上・下巻岩波文庫（東京 1984年）では、「学問は哲学とヴェーダ学と経済学と政治学とである。…「ヴェーダ学と経済学と政治学とが学問である」とマヌの支持者たちは言う。…「何故なら、哲学はヴェーダ学の特殊部門にすぎないからである。」…「経済学と政治学とが学問である」とブリハस्पティの支持者たちは言う。…「何故なら、ヴェーダ学は、世事に通じた人にとって、ご体裁にすぎないから。」…「政治学のみが唯一の学問である」とウシャナスの支持者たちは言う。…「何故なら、すべての学問の始まりは、それに結びつくからである。」…「学問は絶対に四種である」とカウティリヤは言う。…というのは、それら〔四種の学問〕によって法と実利とを知ることができる (vidyāt) というのが、それらの学問 (vidyā) の学問たる所以であるから。…」（上巻27頁6行-28頁5行）とある。
- 29) Cf] KAS₁, iii, pp. 80f; HD, I-I, pp. 144 ff & 205 ff; etc. なお, MS VII. 43 と KAS I. 2. 2-3 との関係に直接言及する箇所(KAS₁, iii, p. 80, ll. 27-31) において, Kangle は Kane が打ち出した “The Manusmṛti dose not positively say that the *vidyās* are four and not three; it simply says from whom *trayi* and the other three are to be] learnt” (HD, I-I, p. 206, ll. 10-13) との視点を全く顧慮していないように見える。
- 30) 前掲上村訳では、「ヴェーダ学者と苦行者の事件の場合は、王は聖火室に入り、宮廷祭僧と学匠とをとともない、起立し敬礼して、それらを審議すべきである。…しかるに、苦行者や、幻術や魔術に通じた人々の事件の場合、三ヴェーダを知悉した人々とともに〔審理を〕行い、自ら〔単独で〕行うべきではない。〔彼らが怒るかも知れぬからである。…〕（上巻80頁6-10行）とある。
- 31) 上村氏によって「諸注釈を簡潔に整理して有益である」（前掲上村訳上巻9頁15行）と言われる KAS₂ の脚注には、“*vaidyāḥ—vidyām adhitavantāḥ*” (p. 42, f. n. 3) とある。
- 32) 前掲上村訳では「哲学とヴェーダ学と経済学の保全を実現するものは王杖（権力、刑罰）である。それを行使する方法が政治学である。」（上巻32頁3-4行）とある。
- 33) 前掲上村訳では「それ故、三種の学問は王杖（権力）に基づく。」（上巻33頁6行）とある。
- 34) 前掲上村訳では「入門式を終えた【王子は】、ヴェーダ学と哲学とを有識者たちから、経済学を〔各部局の〕長官たちから、政治学を〔政治の〕理論家と実践家たち【から〔学ぶべきである〕。】（上巻34頁4-6行）とある。
- 35) 前掲上村訳では「そして…常に学問の先達と交際する。」（上巻34頁8行）とある。
- 36) KAS の作者については、KAS₁, iii, pp. 59-115 が諸説の批評的紹介をも含み極めて有益である。また、前掲上村訳上巻6-8頁も有益である。なお、同書には、「本書〔=

KAS: 筆者註記] は決して諸々の説の寄せ集めではなく、明確に全体の構成を意識した一人の作者によって作成されたものであることは確かなようである。」(6頁7-8行)とある。

- 37) 註29)参照。
- 38) Cf. A. Wezler, “Manu’s Omniscience: On the interpretation of Manusmṛti II, 7”, *Indology and Law: Studies in Honour of Prof. J. Duncan Derrett*, Wiesbaden, 1982, pp.79-105. なお、この Wezler の論文は、MS II.7 の “sarvajñānamayo hi saḥ” 中の saḥ と sarvajñānamayo の解釈に新しい視点をもたらすものである。
- 39) Bühler の英訳では、*“Whatever law has been ordained for any (person) by Manu, that has been fully declared in the Veda: for that (sage was) omniscient.”* (LM, p.30, ll.7-9) とあるも、A. Wezler, *op.cit.*, p.93, ll.14-16, p.94, ll.23-24, n.53 (p.105) 等を考慮して、訂正した形で出す。註38) 参照。なお、前掲田辺訳は、Bühler と同様、その箇所を「何となれば彼(マヌ)は全智なればなり。」(42頁3行)と訳している。
- 40) 前掲上村訳では、「サーマ・ヴェーダとリグ・ヴェーダとヤジュル・ヴェーダとが三ヴェーダである。…そして、アタルヴァ・ヴェーダとイティハーサ・ヴェーダもヴェーダとみなされる。…音韻学、祭式学、文法学、語源学、韻律学、天文学、以上が〔ヴェーダの〕補助学である。…このヴェーダ学〔で説かれた〕法〔典〕は、…」(上巻29頁3-6行)とある。
- 41) MD, ii, p.112, l.17, etc.
- 42) Ibid., ii, p.7, ll.18-19.
- 43) Ibid., ii, p.123, ll.11-13.
- 44) 例えば、Appayyadīkṣita の *Śivādvaitanirṇaya* (Madras Ed. & Tr., 1974, Reprint) にも “traividyaṛddhānām tu vedāḥ pramāṇam iti niṣṭhā /” (p.56, ll.7-8) とあり、*“trayīm vidyām…”* (p.56, l.16) との用例に次いで、*“trayividya…”* (p.57, l.12) とある。それに対して、英訳者 S. S. Suryanarayana Sastri はそれぞれ *“But, it is the firm opinion of those who are well-versed in the three-fold learning that the Vedas are of (supreme) authority.”* (p.81, ll.5-7), *“the study of the three Vedas…”* (p.81, l.29), *“those possessed of the wealth of the three Vedas…”* (p.83, ll.9-10) と訳している。
- 45) JhTV, p.181, l.7.
- 46) Cf. KAS₁, iii, pp.4f., etc.
- 47) [Nitisāra], BI, Calcutta, 1982 (Revised with Eng. Tr.) p.40, ll.1-2, 10-11. なお同テキスト併載の S. Kumar Mitra の英訳を参照。

- 48) ヴェーダの14学を伝えるものとしては、*Yājñavalkyaśmṛti* I.3 が有名であるが、その14学、及び後出の18学に関しては、拙稿「Prapañcahr̥daya 試論——匿名作品の歴史的立場——」『駒大仏教学部研究紀要』44号（昭61年3月）398-377頁（特に394-389頁）を参照されたい。
- 49) 註48)参照。
- 50) 特定の人物（ないし人物群）を指示する *traividya*, *traividyaṣṛddha* は、中世以降の哲学文献などに、必ずしも頻出するわけではないが、したがってそれについて何であれ議論がなされることも稀であっても不思議ではないが、以下の二例についてだけ触れておく。就中 Sarvajñātman の *Pañcaprakriyā* 中の *traividyaṣṛddhāḥ* の用例に対して I. Kocmarek が LR で付し得た註記は、この面での最も実り多いものと言えよう。

“*idam eva vṛttitrayam aṅgikṛtya “samarthaḥ padavidhiḥ” ity atra sūtre jahatsvārthājahatsvārthā jahadajahatsvārtheti bhāṣāpadaprakṣepeṇa traividyaṣṛddhāḥ lakṣaṇāvibhāgaṃ cakruḥ*” (LR, p.128, ll.15-16) に対して、Kocmarek は、“Having accepted these three types of [secondary] usage, those people who are well-versed in the three Vedas have made the distinction [between the different types] of *lakṣaṇā* through their use of the technical terms: ‘abandoning the original sense [of the components]’ (*jahatsvārtha*); ‘retaining the original sense [of the components]’ (*ajahatsvārtha*); and ‘abandoning part and retaining part of the original sense [of the components]’ (*jahadajahatsvārtha*)²⁹ in reference to the *sūtra*: “[Whenever] an operation concerning a finished word [is prescribed, the word] *samarthaḥ*: ‘semantically connected’ [is to be supplied].”³⁰ (p.49, l.37-p.50, l.8) というかなり精密な英訳を与え（辻博士を始めとするこれまで見た多くの注釈者と同様、文中の *traividyaṣṛddhāḥ* を躊躇なく下線部のように訳しているが）、n.29 (p.79, ll.13-38) で、Sarvajñātman の *lakṣaṇā* の三分法の拠ってきたる拠を PS 等との関わりで検討した後に、“Sarvajñātman does seem to be the first Advaitin to use this three-fold division of *lakṣaṇā*, perhaps the original inspiration for his notion of *jahadajahatlakṣaṇā* lies in Patañjali’s *Bhāṣya* on P II. i.1.…” (p.79, ll.29-31) という貴重な見解を披瀝した上で、“To whom is Sarvajñātman specifically referring when he uses the term “*traividyaṣṛddhāḥ*” ?” (p.79, ll.35-37) との当然すぎる問題を提示し、次いで “Perhaps Sarvajñātman is seeking some sort of contrived basis for his three-fold division of *lakṣaṇā* in the writings of the Grammarians.” (p.79, ll.37-38) と結んでいる。なお、ヴェーダーンタ学派の文章論における *lakṣaṇā* の三分法につ

いては前田専学著『ヴェーダーンタの哲学』平楽寺書店（京都 1980年）207-215 頁を参照されたい。

また、中村元博士は、*Śarvadarśanasamgraha* の Śāṅkara-darśana 中ただ一度現われる traividyaṛddha を「シャンカラ説とナクリーシャ・パーシュパタ説—*Sarvadarśanasamgraha* 第一六，第六章翻訳—」『三康文化研究所紀要』9号(昭52年3月)1-122頁と題する和訳中で、「三ヴェーダに通じた古人」(80頁5行)と訳された上、註記して、「ここでいう『三ヴェーダに通じた古人』が誰であるか不明であるが、その句〔＝引用句：筆者註記〕の中にサーンキヤ派的な術語が用いられている。(個我を *puruṣa*, *puruṣ* といい *mahat* にも言及している。)したがって、かなり後世のヴェーダーンタ派の学者であろうと思われる。そうしてこの句は、不二一元論派がマダーヴァよりも以前からサーンキヤ思想の影響を受けていたことを示すものとして重要な意味がある。…」(99頁23行-100頁3行)と指摘しておられる。